



Title	「アメイジング・グレイス」の起源と背景
Author(s)	櫻井, 雅人
Citation	一橋論叢, 130(3): 169-187
Issue Date	2003-09-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/10145
Right	

「アメイジング・グレイス」の起源と背景

櫻 井 雅 人

(1) 「アメイジング・グレイス」の起源と背景

アメリカではしばしば賛美歌の人気投票 (Favorite hymn poll) が行われており、一九八九年以降に発表された十種類の投票結果によると、「アメイジング・グレイス」を第一位としたものがそのうちの八つ (第二位としたものが二つ) にのぼるといふ。もちろん、時代やその他の文化的背景によって結果は大きく変わりが、少なくとも現在のアメリカでは「最も人気のある」賛美歌 (の一つ) である、といえよう。人気は教会内にとどまらず、多くの歌い手たちがレコードやCDに吹き込んでいるし (もともと、本来の賛美歌としてのCDは少ないが)、日本でもTVコマーシャルの背景音楽などにも使われてきた。このことは演奏や編曲の数からも窺われる。アメリカの代表的な音楽著作権団体であるASCAPには三七三、BMIには七三

三の編曲 (作品) が登録されている (二〇〇三年六月現在、それぞれのウェブサイトの検索結果による)。「アメイジング・グレイス」が収録されたCDアルバム (現在入手可能なもの) は二七四八 (重複およびこの名を含む別の曲もあるので実際にはもっと少ないだろう) もある。

このような「人気」とは裏腹に、この歌 (とくに旋律) の由来についてはそれほど詳しく知られているとはいえない。曲・歌詞ともにヴァリエーションが非常に多くて何が元々のヴァージョンであるのかがわかりにくいし、最近のようにインターネットで情報の伝達が行われるようになると簡単に事が解決されるかというところ、かえって憶測や俗説が飛び交って、正しい情報が埋もれてしまうこともある。これは「アメイジング・グレイス」に特有なこと

はなく、案外と有名曲のエピソードにしばしばみられる。また、これもよくあることだが(たとえば、「オールド・ラング・サイン」とか「アメリカ・ザ・ビューティフル」)、「アメijingング・グレイス」は歌詞と曲とがそれぞれ異なった起源から由来していて、後になって現在の形に融合したものである。このように入り組んだ経歴を持つ歌であるので、これまで何がわかっていて何がわかっていないのかを整理してみることにした。

原詩はイギリスの牧師ジョン・ニュートン(John Newton)が書いたもので、詩人ウィリアム・クーパー(William Cowper)との共著『オウルニー賛美歌集』(*The Olney Hymns*) (オウニーとも発音する)に「賛美歌第四一編」として収められ、一七七九年出版された。この賛美歌集は三四八編から成る詩集(曲は付されていない)であって、うち六七編はクーパー作で、大半(および序文)はニュートンの手になる。歌の「現行」の歌詞には各種あるが、それは短縮・追加・変更などさまざまな異動によるものである。あとに述べるシェイプ・ノート聖歌集以外ではニュートンの歌詞どおりに歌われるものは少ないと思われるので、ここに原詩を示しておく(ステイヴ・ター

ナーの著書に付けられた写真版による。第五連では綴りをvaliのままにしておいた。なお、原著ではロング・エスの活字を使用している)。

I. CHRONICLES.

HYMN XXI.

Faith's review and expectation.

Chap. xvii. 16, 17.

1 Amazing grace! (how sweet the sound)

That sav'd a wretch like me!
I once was lost, but now am found,
Was blind, but now I see.

2 'Twas grace that taught my heart to fear,

And grace my fears reliev'd;
How precious did that grace appear,
The hour I first believ'd!

- 3 Thro' many dangers, toils and snares,
I have already come ;
'Tis grace has brought me safe thus far,
And grace will lead me home.
- 4 The LORD has promis'd good to me,
His word my hope secures ;
He will my shield and portion be,
As long as life endures.
- 5 Yes, when this flesh and heart shall fail,
And mortal life shall cease ;
I shall possess, within the veil,
A life of joy and peace.
- 6 The earth shall soon dissolve like snow,
The sun forbear to shine ;
But GOD, who call'd me here below,
Will be for ever mine.

ニュートンは、回心してからも奴隷船の船長としてアメリカからアメリカへの奴隷貿易に従事したが、のちに牧師になった人で、これは自伝的な作品であるといわれる。自分のような“wretch”（人でなし、卑劣漢）とは、奴隷貿易に携わったことと解される（ニュートンは他の作品でも“wretch”という語を用いて回心を扱っている）。

興味深いことに、ニュートンの作品の中で今では最もよく知られているこの詩は、「イエス君の名は」(How sweet the name of Jesus sounds) などの他の有名な作品とは違って、ことに母国のイギリスにおいて、長い間あまり注目されてこなかった。ジョン・ジュリアンの『賛美歌学辞典』⁽⁶⁾に見出し項目はあるが、出典等の記録（四行）の他には「イギリスでは現代の賛美歌集とは無縁である (unknown to modern collections) が、アメリカでは広く使われている。ニュートンの作品としてはよい出来の例とは到底いえない (far from being a good example)」(これが全文である) という否定的な評価の解説文が付けられているだけである。今でも「ニュートンの作品のうちでは必ずしも特にすぐれたものではない」とも言われるし、最近のイギリス賛美歌史でも『オウルニー賛美歌

集』に二〇頁近くのスペースを割いていても「アメイジン
グ・グレイス」には五行ほどの簡単な記述(および歌詞の
一部分)があるのみでおおざりなりの扱いという印象を受ける。
そもそも多くの賛美歌集(とくに各教派が編纂した公式賛
美歌集・聖歌集)にはなかなか収録されてこなかったのだ
である。イギリスの例をみると、『古今聖歌集』(Hymns An-
cient and Modern, New Standard, 1983)、『イギリス聖歌
集』(The English Hymnal, 1906, 1933)、『賛美の歌』
(Songs of Praise, 1931) などには未収録であり、含まれ
ているものとしては最近の非アングリカン系の賛美歌集が
中心のようである。もっとも二〇世紀後半のアメリカでも
すべての賛美歌集に含まれているのではなく、『クリス
チャン・サイエンス賛美歌集』(Christian Science Hym-
nal, 1960) には見られなかったし、六〇〇曲以上の代表的
なアメリカの賛美歌を集めようとしたと思われる歴史的・
汎教派的・資料集的歌集『古今アメリカ賛美歌集』(Ameri-
can Hymns Old and New, 2 vols. Columbia Univer-
sity Press, 1980) のように(理由は不明ながら)未収録
のものがある。監督教会の公式賛美歌集では一九八一年の
補遺(Lift Every Voice and Sing)として一九八二年版

(The Hymnal 1982) になって初めて登場した。⁽¹⁰⁾

多くの賛美歌と同様に、「アメイジング・グレイス」に
もいくつかの曲が配されてきた(それゆえ、賛美歌では題
名(ふつうは歌い出し)と曲名(旋律名)とを別個に記載
している。本稿でも曲名は大文字で記す)。「ニュー・ブリ
テン」(NEW BRITAIN)の旋律が定着するまでは二〇曲
以上がこの歌詞で歌われ、その中では「アーリントン」
(ARLINGTON)が最も一般的であったという。⁽¹¹⁾一九世紀
後半に一世を風靡したサンキーとムーディーらのゴスペル
賛美歌では「ウォリック」(WARWICK)の曲(Samuel
Stanley 作曲)が選ばれていた。⁽¹²⁾ジャクソンの『東部沿岸
地方の靈歌』(No.127)に掲載の版は曲名がAMAZING
GRACEではあるがまったく別の旋律であり、今でも
『ノーザン・ハーモニー』⁽¹³⁾に採用されている。また、『ハル
モニア・サクラ』所収の曲は「グリーンヴィル」(GREEN-
VILLE)と題されてさらに異なるものである。黒人ゴス
ペル音楽での「アメイジング・グレイス」は大きく変容し
ているものが少なくないので、どこまでが「同じ」曲とい
えるのかは難しいところであるが、明らかに異なった旋律
を採用しているものもある(たとえば、ブライインド・ボー

(5) 「アメイジング・グレイス」の起源と背景

イズ・オヴ・アラバマの版は“The House of the Rising Sun”⁽¹⁶⁾(邦題「朝日のあたる家」)の旋律)。

現在よく知られているような曲と歌詞が一体となった形になったのは、一八三五年出版のシェイプ・ノート聖歌集『サザン・ハーモニー (Southern Harmony)』においてニュートンの歌詞が「ニュー・ブリテン」と呼ばれる曲と組み合わされたことによる。シェイプ・ノート歌唱は十九世紀のアメリカ南部(とくに農村山村地域)の歌唱学校(singing school)において盛んであった歌唱スタイルで、楽譜を読みやすくするために考案された三角・四角・菱形・円のシェイプ・ノート(shape note)と呼ばれる音符を採用した歌集(たいていは横長のやや大きめのハードカバー)を使っている。とくに有名なものには、ウィリアム・ウォーカー (William Walker) 編のこの『サザン・ハーモニー』と、一八八四年(初版)出版のベンジャミン・フランクリン・ホワイト (Benjamin Franklin White, ウォーカーの義弟) 編『セイクレッド・ハーブ (The Sacred Harp)』がある。⁽¹⁷⁾『セイクレッド・ハーブ』はシェイプ・ノートの代名詞ともされるくらい代表的な歌集であり、改訂版がいまだに使われている。⁽¹⁸⁾ 全米の人口が

二千数百万人の時代に、ウォーカーの言によると、『サザン・ハーモニー』は「六〇万部以上」売れた。この数字にどの程度の信憑性があるのかわからないが、シェイプ・ノート聖歌集が大量に出版されたのはそれだけの需要があったものと考えられる。⁽¹⁸⁾ 歌のほうも、それにともなって普及したと推測される。

『サザン・ハーモニー』と『セイクレッド・ハーブ』において「ニュー・ブリテン」の内容は歌詞・編曲なども含めて同じである。いずれも曲名を題名としており、歌詞の出典は“Baptist Harmony, p.123”で、作者名は示されていないが、ニュートンの歌詞六連がそのまま付されている。『サザン・ハーモニー』(一八五三)版は稿末の楽譜を参照されたい(一八五四年版も同一のプレートを用いている)。なお、シェイプ・ノート聖歌集の特徴として、主旋律はテナーに置かれている。⁽¹⁹⁾『バプティスト・ハーモニー』そのものは参照できなかったが、当時いくつも出版されていた歌詞のみの賛美歌集(たとえば Benjamin Lloyd, *The Primitive Hymns, Spiritual Songs, and Sacred Poems*, 1841, 1894; Primitive Hymns Corporation, 1999)のうちにも“Amazing Grace”の歌詞が収録されている)の一つと

思われる。曲についてはウォーカーを作曲者とする記述を時折見かけるが、『サザン・ハーモニー』では自分の作品(たとえば、同じく「パプティスト・ハーモニー」から歌詞がとられた二頁の「Jerusalem」)には「Wm. Walker」と名前を付けているので、「ニュー・ブリテン」に同じくウォーカーは自分が作曲したとは主張していらし、その意識もなかった、と考えるのが順当である。なお、「ニュー・ブリテン」とは地名から来ているように、アメリカ合衆国でこの名の町は一つのみでコネチカット州のハートフォード(Hartford)郡にある。⁽²²⁾

曲の出典に「just a traditional and early American melody (あるいは unknown) などとしているものも少なくないが、多くの賛美歌集(『讚美歌二二』、『新生讚美歌』なども)では一八三二年出版の『ヴァージニア・ハーモニー』(Virginia Harmony)を曲の出所としている。この聖歌集にこの曲が収録されていることを初めて報告したのはジョージ・パリン・ジャクソンであろう。彼は、クレイトンとキャレル(David L. Clayton and James P. Carrell)が編集したこの本(表題紙の欠けている第二版)をナッシュヴィルの古書店で見つけて、『初期アメリカの

スプリチュアル民謡』⁽²³⁾の「No.135: NEW BRITAIN or HARMONY GROVE」の収録聖歌集のリストに加え、この中で時代的に最も古い記録が『ヴァージニア・ハーモニー』版であった。『ヴァージニア・ハーモニー』では「ハーモニー・グローヴ」(HARMONY GROVE)と題されて「There is a land of pure delight」(Isaac Watts)の歌詞が付けられているという。曲名はこのほかにも SYMPHONY, SOLO, REDEMPTION, MIDDLETON, GALLAHER, FRUGALITY, ANDERSON, CHALMERS, HARMONY がある。後になつての曲の『サザン・ハーモニー』以前の記録は『ヴァージニア・ハーモニー』を含めて五点存在することが明らかになるが、しばらくの間は(そして現在でも)『ヴァージニア・ハーモニー』を出典とする記述が広まっていた。

一九九〇年にマリオン・ハチェットによって新たな初出文献が発見されて記録の修正が必要になった。⁽²⁴⁾この文献とは、スピルマンとショーが編集して一八二九年にシンシナティで出版された『コロロンピアン・ハーモニー』(Charles H. Spilman and Benjamin Shaw, *Columbian Harmony*, 1829)であり、それまで知られていなかった

シェイプ・ノート歌集であった。⁽²⁵⁾ その中に「セント・メアリ」(ST. MARY'S) および「ギャラハー」(GALLAHER)の二曲がそれぞれ別の歌詞で含まれている。稿末に写真版から写した楽譜(主旋律のみ)を付けておいた。「セント・メアリ」、「ギャラハー」、「ニュー・ブリテン」を並べてみると全体的な旋律曲線は「同じ」で、この程度の相違であれば民謡などにおいては「同じ曲」のヴァリエーションの範囲内にある。また、多くのシェイプ・ノート歌謡と同様に民衆的な旋律を既存の歌詞に当てはめたものと考えられる。これら三版の相違をみると、口頭伝承によって伝えられた旋律であって、もとは別の歌詞の民謡(複数かもしれない)であったと推測される。「ギャラハー」のほうが「ニュー・ブリテン」に近いが、出版の時期が接近しているので「ギャラハー」から「ニュー・ブリテン」が直接由来するとは言いがたいだろう。つまり、これらは同時並行的に伝承されていたものと考えるのが自然である。なお、ジャクソンが「ハーモニー・グローヴ」のヴァリアントとして紹介している「プリムローズ」(PRIMROSE)も関連曲かもしれないがあまり似ていない(稿末楽譜参照)。

今のところこれ以前に遡ることはできない。非常に詳しいテンパー編『賛美歌曲目索引』⁽²⁷⁾にはそれらしき曲が見当たらない(もっとも、似た曲を探すこと自体が困難な作業で、見落としはありうるし、賛美歌集以外はこの索引曲は数字譜で示されているのの對象となっていないので、「それ以前の賛美歌集には見当たらない」というのが正確であろう)。

多くの賛美歌集に採用されているのは、エドウィン・エケセル(Edwin Ohello Excell)が北部の「教養人」の好みにも合うように「賛美歌らしい」和声をつけて編曲し、曲名も「アメイジング・グレイス」に変更されたもので、一九〇〇年に『栄えある賛美をささげよ』(Make His Praise Glorious)⁽²⁸⁾に収録され、また一九〇九年の『世界的に名高い賛美歌』(World Renowned Hymns) および一九一〇年の『戴冠賛美歌集』(Coronation Hymns)でやがてに現行のように改訂された。歌詞は一から三番までをニュートンから採用し、一九〇〇年版ではなくてこの時に別の歌詞(“When we've been there ten thousand years”)を四番として付け加えたものである。この四番は『ヤイクレマ・ハーブ』では AKERS (p.293), HOR-

TON (p.330), MANCHESTER (p.392), FAITH AND HOPE (p.462) の最終連とされてゐる歌詞で、ジョン・リース作と伝えられてきたが、いわゆる「浮動スタンザ」(wandering or floating verse)であつて、初出は一七九〇年発行の『聖なるバラッド集』(A Collection of Sacred Ballads)に収録された「Jerusalem, My Happy Home」の最終連に見られる、といふ。⁽²⁸⁾

ブラック・ゴスペル版、フォーク版などは必ずしもエッケル版の焼き直しではないので、別途に検討すべきであろう。⁽³¹⁾ これらでは旋律が相違したり、歌詞も短縮されたりさまざまな異なった連を含むことがしばしばある。また、テクストのみならず、歌唱スタイルを問題にしなくてはならない。

原曲に関しては、「Loving Lambs」といふ「プランテーション・メロディー」(plantation melody)⁽³²⁾ から由来する、という解説が一般には散見されるので一言付け加えておきたい。この曲名はこれまで参照してきた然るべき資料・文献ではまったく触れられていないものである。この曲目が原曲であるとしたら「重要な発見」であろうが、なぜか題名のみが伝えられていて、出典・歌詞・旋律等を紹

介したものが見当たらない。この主たる情報源は一九八二年に出版されたケネス・オズベックの『賛美歌一〇一曲ものがたり』⁽³³⁾ と思われる。これはいまでも入手可能な一般向けの本で、かなりの部数が出ているようである。ここでは「アメイジング・グレイスの曲は初期のアメリカの民衆曲 (folk melody) であつて、初めは「Loving Lambs」と題するプランテーション・メロディーとして知られていた」と書かれている(情報はこれのみ)。オズベックはこの起源説をどこから得たのか(つまり、誰に「知られていた」のかということ)を述べてはいないが、なぜか確信しているようで、同じことを(やはり出所を示さずに)他の本でも繰り返し述べている。⁽³⁴⁾ 「プランテーション・メロディー」といふとミンストレル・ソングの別称として使われた表現(ステイヴン・フォスターのいくつかの楽譜にも大きく「プランテーション・メロディー」と書かれている)であるが、主だったミンストレル関連文献にこの題名は出てこない。また、主だった黒人霊歌や黒人歌謡の文献、各種の曲目索引にも見当たらない。アメリカ議会図書館などのシート・ミュージック・コレクションにも含まれていないし、いくつかのアメリカ史関係のウェブサイトにもこの名

称では記録がない。

類似の題名の歌としては、『ジャクソン』もう一束の白人露歌⁽⁸²⁾に LOVING LAMB (単数形) なる露歌 (出典は *Re-nuzelist*, 1868, No.322) が収録されている。冒頭の部分 (三小節) は「アメイジング・グレイス」に幾分か似ているといえないこともない (稿末楽譜参照)。さらに、これは同じくジョン・ニュートンの歌詞でもある (コーラス部分は “O the Lamb, the loving Lamb, / The Lamb of Calvary”)。ほぼ同じ歌詞ですべて『ササン・ノーキニー』(1835, p.268; 曲名は PARDONING LOVE) に載っている。旋律は PLETTY (*Sacred Harp*, 1850 ed., p. 284) と似たところがある。筆者の推測では、オズニックの “Loving Lambs” と同じ LOVING LAMB のヴァリエーションではなからうか (しかも、年代は一八二九年よりは前ではない)。いずれにせよ、信頼置ける資料なり証拠がない限り推測の域を出ない。オズニックが別の本で使っているもう一つの綴り (“Living Lambs”) に対応する題名としては LIVING LAMB (やはり単数形) という聖歌 (*Sacred Harp*, 1850 ed., p.309; 歌詞は “Am I a soldier of the cross”) がある。この歌詞 (Watts) が AR-

LINGTON でも歌われたという共通点はあるものの、曲想からすると無関係であろう。典拠の怪しげな情報が一歩きをしているということ自体は、フォークロアの題材とはなるだろうが、歴史ではない。

これと関連するが、この歌を奴隷たちが歌い広めたということが明白な事実であるかのように扱われることがある。可能性もあるが、その場合でも曲が NEW BRITAIN であったのかはきわめて疑わしい。ウィリアム・バートンが一八八〇年代にテネシー州で採録した「私は叫びながら死にたう」 (“I Want To Die A-Shouting”) は “Amazing Grace” と “Jesus My All” の “Am I a Soldier” などと合わせ合わせた歌詞の歌で、曲は NEW HARMONY (シエイク・ノート聖歌) のヴァリエーションである。また、『カルフーン・プランテーション・ソングス』⁽⁸³⁾ にも “Amazing Grace” と題した歌 (アラバマ版) が収録されており、第一連はニュートンの歌詞 (ただし、そのままではない) から一部分を借りてきているがあととは違う (曲も「ニュー・ブリテン」ではない)。ついにながら、冒頭部分はインドネシア歌謡の「かわいらしいの娘」に似ている)。

また、この曲がスコットランド起源であるという説は以

前からなまやかれており、ことに最近のようにスコットランド曲集と題する歌集やCDにも含まれるようになる。しかしそうスコットランド起源説にはずみがついてくる。しかし、バグパイプ版(稿末楽譜参照)は一九七二年の王立スコットランド近衛竜騎兵連隊軍楽隊(Royal Scots Dragoon Guards)の演奏に始まり、これはジュディ・コリンズ版を基にしている。⁽³⁸⁾ヴァン・デル・マーヴェは、「アメイジング・グレイス」の旋律はスコットランド起源であって「ロッチ・ローモンド」(Loch Lomond)と明らかに縁戚関係(obvious relative)にある、⁽³⁹⁾というが、具体的に元のスコットランドの曲を提示しているわけではないし、「ロッチ・ローモンド」とどこで繋がるのか不明である。⁽⁴⁰⁾曲調からするとスコットランド系であって、アパラチアなどにはスコッツ・アイリッシュなどのスコットランド系移民が多く住んでいることを状況証拠として付け加えることができるが。

最後になったが、日本での賛美歌集について簡単にふれておく。AMAZING GRACEの旋律でこれが収録されている賛美歌集等としては、『讚美歌第二編』(日本基督教団出版局、一九七四、一六七番「われをもすくいし」、曲名

AMAZING GRACE) がはやごようである。その後には『聖歌』(日本福音連盟、一九八六、二二九番「おどろくばかりの」、曲名GRACE)、『新生讚美歌』(日本バプテスト連盟、一九八九、一〇一番「いかなる恵みぞ」曲名AMAZING GRACE)、『リビング・プレイズ』(いのちのことは社、一九九五、六四番、「驚くばかりの」、歌詞は二連のみ)、『讚美歌二二』(日本基督教団出版局、一九九七、四五一番「くすしみ恵み」、曲名AMAZING GRACE)、『新聖歌』(教文館、二〇〇一、二三三番「おどろくばかりの」、曲名GRACE)と続いて現在に至っている。⁽⁴¹⁾いまだに統一した邦題・定訳がないものと見受けられる。ポピュラー音楽としてはそれ以前より「至上の愛」という題名が使われてきた。⁽⁴²⁾

違⁽⁴³⁾う曲ではあるが、歌詞のほうはすでに明治時代に訳されている。国立国会図書館近代デジタルライブラリーの所蔵版を見ると、植村正久等編『新撰讚美歌』(警醒社、明治二二(一八八八)年四月、第一七〇、一五九―一六〇頁、歌詞のみ、曲名ARLINGTON)にあり、第一節は「かくばかりつみに／けがれし身を／すくへるめぐみは／いとまたうとし」と訳されている。楽譜付きとしては、讚美歌委

員編『新撰讚美歌』(出版者)植村正久等、明治二三(一八九〇)年十二月、第一七〇、(曲名 ARLINGTON)があり、ここでの歌詞の表記は「いとまたふと」となっている。なお、この賛美歌集の解説書である戸川残花『新撰讚美歌てびき』(警醒社、明治二四(一八九一)年四月)にこの歌は扱われていない。もう一点、『基督教聖歌集』(福音堂、明治二三(一八九〇)年五月、第八二、四七―四八頁、歌詞のみ、曲名なし)に「まよひにしわれを／助けしきみの／あやしきめぐみは／いとまたうとし」という訳がある。鶴飼清吉発行の同年八月版『基督教聖歌集』では番号・頁は同じであるが、歌詞は「いとまたふと」である。ARLINGTON は当時のアメリカでの一般的な曲といわれる。復刻版のコレクションである『明治期讚美歌・聖歌集⁽⁴⁾成』には、“Amazing Grace”の訳詞が収められたところの賛美歌集がならに見出せる。それらは、第一三巻(浸禮教會『基督教讚美歌』明治二〇(一八八七)、第二一七「まよひにしわれを／たすけしきみの」、(曲名 WOODLAND)、第一四巻(米國浸禮教會傳導會社『基督教讚美歌』一八九六、第六六「さまよふめしひを／すくいたまふ」、(曲名 ARLINGTON、楽譜あり)、第一五巻(美以美

教會雜書會社『基督教聖歌集』明治一七(一八八四)、第八二「まよひにしわれを／助けしきみの」、(曲名 WOODLAND、楽譜あり)、第一六巻(『附譜基督教聖歌集』メソヂスト出版舎、明治二八(一八九五)改正増補、第二一七「たへなるめぐみや／いとあやふき」、(曲名 DOWNS、楽譜あり)、第二三巻(讚美歌委員編『新撰讚美歌』明治二三、第一七〇)、第二四巻(讚美歌委員編『新撰讚美歌』(ソルファー譜付)明治三三、第一七〇、(曲名 ARLINGTON)である(つぶさに調べたのではないので他にも収録賛美歌集があると思われ)。曲はいずれも NEW BRITAIN (AMAZING GRACE) ではなく。NEW BRITAIN 以外では定着しなかったようである。

(1) Steve Turner, *Amazing Grace: The Story of America's Most Beloved Song* (Ecco, 2002), p.229.

(2) Amazon.com: Music Search Results (amazing grace) <https://www.amazon.com/s?k=amazing+grace> (2023年6月)。この中にはレコード(Sp・LP)および廃盤とか多くの外国盤(日本を含め)が数に入っていないが、重複はかなりたくさんあると思われる。正確な数はわからないが、ターナーは「一一〇〇以

- 上」と言う(p.177)。アメリカ議会図書館所蔵の四五七点(ただし、二〇〇三年六月現在では四九六点になっている)のうち、九七パーセントは一九七一年から二〇〇一年までにリリースされたレコード(p.178)。
- (8) J.R. Watson, *The English Hymn: A Critical and Historical Study* (Oxford: Clarendon Press, 1997), p.282.
- (4) Turner, *Amazing Grace*, frontispiece. 日本基督教図書館所蔵版から。
- (5) ただし、NHK総合テレビの番組『アメイジング・グレースの魂—賛美歌が語り継ぐアメリカ』(二〇〇二年一月一九日放送)の中で紹介されたマイクローフィルムのシーンでは“veil”と表記された。
- (9) John Julian, *Dictionary of Hymnology*, vol.1 (1907; Kregel, 1985), p.55 [s.v. Amazing grace, how sweet the sound].
- (7) 原恵『賛美歌—その歴史と背景』(日本基督教団出版局、一九八〇)一五八頁。
- (8) Watson, *The English Hymn*, pp.282-99.
- (9) 日本基督教団『*Hymns for Today's Church* (1987); *Baptist Praise and Worship* (1991); *The Source* (the definitive worship collection compiled by Graham Kendrick) (1988).
- (10) Raymond F. Glover, ed., *The Hymnal 1982 Companion*, vol.III B (Church Hymnal Corporation, 1994), p.1238.
- (11) Turner, p.132. 後にも述べるように、一八八〇年代に日本語に訳された賛美歌の曲中にはARLINGTONを採用している。ARLINGTON はトマス・トーン (Thomas Arne) のオペラ『トレンタツセルタヤス (*Artaxerxes*)』(1762) 序曲中の旋律から由来するもので、他のいくつかの賛美歌にも用いられている。日本では『聖歌』五十七番「十字架の兵士たる」の曲になっている。
- (21) Ira D. Sankey et al., eds., *Gospel Hymns Nos.1 to 6 Complete* (Biglow & Main, 1895), No. 680 [p.650].
- (22) George Pullen Jackson, *Down-East Spirituals And Others* (1943; rpt. Da Capo, 1975), p.140 [No.127]. 再版 ‡ Joseph Hillman, *The Revivalist* (1868; revised and enlarged edition, 1872).
- (14) Larry Gordon et al., eds., *Northern Harmony*, revised third edition (Plainfield, Vermont: Northern Harmony Publishing Company, 1995), p.9.
- (15) *The Harmonia Sacra*, 25th edition (Intercourse, Pennsylvania: Good Books, 1993), p.115. ‡ GREEN-VILLE へ移ってからは、この原曲を「マンーの歌

(13) 「アメイジング・グレイス」の起源と背景

- (Rousseau's Dream)」（「ラウセウの夢」）の原曲）の旋律ではない。後者は SWEET AFFLICTION (pp.176-77) として別に収録。また、「アメイジング・グレイス」の旋律も含まれているが、別の曲名 (SOLO) でありウィリアム・クーバーによる別の歌詞 (“There is a fountain filled with blood”) が付されている (p.109)。
- (16) Blind Boys of Alabama, *Spirit of the Century* (Real World CDRW95, 2001)。ただし、一九九六年の *I Brought Him Up with Me* (House of the Blues 51416 1274 2) では従来の旋律（のロスレル版）を歌っていた。
- (17) シェイプ・ノート歌唱（最近では「白人霊歌」(white spiritual) という表現はあまり使われなくなっている) はすでに過去のものを受け取られることもあるようだが、いまだに健在で、それはかりか近年に至ってしばしば「リヴァイヴヴァル」という表現が使われるほどますます盛んになってきて南部のみならず全米各地（さらにはイギリスでも）でシンク（歌唱集会）やコンサベーション（歌唱大会）が開かれている。日本ではあまり知られていないが（アメリカでも『セイクレッド・ハーブ』と言うと変わった楽器の一種と誤解されることもあるという）、アメリカ音楽通史ではシェイプ・ノート歌唱についてある程度の記述が当てられるのが一般的である (Gilbert Chase, *America's Music*,

3rd ed., University of Illinois Press, 1992, pp.170-191; Charles Hamm, *Music in the New World*, Norton, 1983, pp.261-274; Daniel Kingman, *American Music: A Panorama*, 2nd ed., Schirmer Books, 1990, pp.134-139)。^註 John Bealle, *Public Worship, Private Faith: Sacred Harp and American Folksong* (University of Georgia Press, 1997); Buell E. Cobb, Jr., *The Sacred Harp: A Tradition and Its Music* (University of Georgia Press, 1978, 1989) などを参照。『ヤンクマニッシュ・ノート』の最終の歌は「Original Sacred Harp (Denson Revision) (Cullman, Alabama: Sacred Harp Publishing Company, 1971), *The Sacred Harp (1991 Edition)* (Sacred Harp Publishing Company, 1991), *The B.F. White Sacred Harp (Revised Cooper Edition)* (Samson, Alabama: Sacred Harp Book Co., 2000) などの二冊が現行版で、表紙の色から俗にそれぞれ「レッド・ブック」（これが最も普及している版である）および「ブルー・ブック」とも呼ばれる。『ソルモニア・サクラー』は一八三二年より続くメノー派の歌集で現在第二五版（一九九三年版）を数える。復刻版では『ササン・ハーモニー (*The Southern Harmony & Musical Companion*)』（1854 edition, University Press of Kentucky, 1987; with CD) 。

『リター・ノート・オン・ロンゴット (*The New Harp of Columbia*)』(facsimile edition, University of Tennessee Press, 2001; 以下「AMAZING GRACE」の略称とする) MIDDLETON による別の歌謡バージョンがある。『ノーサン・ノーサニー』は北部で出た新しい聖歌集であり、他にも各種の歌集(ふじっくは tunebook と呼ばれている)が出版されている。アメリカン・アメリカン系の「カラー・ド・セイクレッド・ノート」も行われている。商業録音の CD は数が少ないが、内輪では(じまじり、一般のレコーズ店では卸してはならない)多くの CD が作られて出回っている。インターネットでもいろいろな歌謡を聞ける。なお、(たういせつ、Voices Across America: Shape-Note Music, <http://www.pilgrimproduction.org/sacredharp.html>)。以下「一本の○」は『The Sacred Harp』のオンライン(<http://digital.lib.msu.edu/ssb/image.cfm?TitleNo=172&image=001>)に参照回数を示す。(NEW BRITAIN 誌 p.45 以下参照) 諸国や地域の異なる『The Sacred Harp Online Index』(<http://fasola.org/index/0/index.html>) がある。また『The Southern Harmony』のインターネット版がある(<http://www.ccel.org/s/south-harmony/title.html>) (ごまは NEW BRITAIN に検索された)。リター・ノートを強調しては Fasola

Home Page (<http://fasola.org/>) を参照された。

(2) 邦語の “shape-note business” については Russell Sanjek, *American Popular Music and Its Business, Vol. II: From 1790 to 1909* (Oxford University Press, 1988, pp.190-95) 参照。

(3) このタイトルのもとには、アメリカ議会図書館(コロンビアン・カタログを参照した)に Staunton S. Burdett 版(1874)と B.W. Nash 版(1876)とが所蔵されている。年代をみればわかるように、

(2) Dorothy D. Horn, *Sing to Me of Heaven: A Study of Folk and Early American Materials in Three Old Harp Books* (University of Florida Press, 1970), p.143.

(2) George Pullen Jackson, *White Spirituals in the Southern Uplands* (1933; rpt. Dover, 1965), p.35. 以下「これは見聞したことではあるが、「人気のある曲」の中に(巻末)には HARMONY GROVE の Virginia Harmony の曲があること」(p.134)。

(2) Jackson, *Spiritual Folk-Songs of Early America* (1937; rpt. Dover, 1964), p.153.

(2) *The Hymnal 1982 Companion*, vol.III B, pp.1238-42. 曲の題名をソングブックの White Spirituals, p.134) 及び SYMPHONY, SOLO, REDEMPTION 等のキー

- (Horn, *Sing to Me of Heaven*, p.152) ㊦ MIDDLETON, GALLAHER, FRUGALITY を挙げよう。
- (24) 初めは一九九一年の論文で発表されたもので、チャットは “Amazing Grace” と題する調査の結果を *The Hymnal 1982 Companion*, vol.III B (1994, pp.1236-43) に挙げる。また Marion J. Hatchett, *A Companion to The New Harp of Columbia* (University of Tennessee Press, 2003, s.v. MIDDLETON, pp.165-66) を参照。わたしたち原著者の関連ページ (1編) の写真版がある。
- (25) なお、他は前回オタノールの文献 (Joseph Stone and Abraham Wood, *The Columbian Harmony*, 1798; William Moore, *Columbian Harmony*, 1825) があるが、別の本のようにある。前者はアメリカ議会図書館オンライン・カタログ (url) に Spilman and Shaw 版はなら、後者はジャクソン『初期アメリカのスピリチュアル民謡』の文献リストにある。
- (26) Jackson, *Down-East Spirituals And Others*, p.172 [No.165]. 詞は Isaac Watts' 出典は *Original Sacred Harp* (1911). なお LONGING FOR HOME (1たのこみあるわ) (『讃美歌集』二編) がある。「キリストがわかれした」(『讃美歌集』二編) の旋律 LAND OF REST の前身も同じ旋律型であり、ジャクソンは黒人霊歌の “Swing Low” の関連を示唆する。
- (27) *The Hymn Tune Index: A Census of English-Language Hymn Tunes in Printed Sources from 1535 to 1820*, 4 vols., edited by Nicholas Temperley (Oxford: Clarendon Press, 1998).
- (28) 「註釋」(六六一) から見た書名がある。 *Make His Praise* (『讃美歌集』一略集) 日本基督教団出版局、一九九八(二八四頁) における記述。
- (29) John P. Reese (Rees の綴りもある) は兄弟 (兄弟が年上か不明) の牧師 H.S. Reese (b. Jasper, Ga., 1828) と共に『ヤンクベツ・ノート』の普及に努めた歌唱指導者で、現在の版は十編を含む作品を残している (Cobb, *The Sacred Harp*, passim)。*The Hymnal 1982 Companion*, vol.III (p.580) には見出し項目があり、**“REES, JOHN, listed incorrectly as author of the final stanza of 671 [“Amazing Grace”]. See the entry at 671.”** と「作者ではないか」(大塚野百合『賛美歌・聖歌ものがたり』師ではないか) (大塚野百合『賛美歌・聖歌ものがたり』創元社、一九九五、九三頁) との推測は誤りである。
- (30) この版のつづきの主要な点は *The Hymnal 1982 Companion*, vol.III B, p.1238; *A Companion to The New Harp of Columbia*, p.166 によった。なお、この歌詞は金

ホセ・ジョージ・カバ『聖業録「聖」の「Jerusalem, My Happy Home」(たのしみと平和の歌)』などあり。

- (26) 藤田のノートとゴスペル Robert M.W. Dixon et al., *Blues and Gospel Records 1890-1943*, 4th ed. (Oxford University Press, 1997) 44-45の Guthrie T. Meade, Jr. et al., *Country Music Sources: A Biblio-Discography of Commercially Recorded Traditional Music* (Southern Folklife Collection, University of North Carolina with the John Edwards Memorial Forum, 2002) を参照。本題の歌謡について Turner, *Amazing Grace* を参照。和歌の和歌謡スタイルについては本稿註や本誌の *Amazing Grace With Bill Moyers* (PBS Home Video [PBS 102], 1990) を参照してほしい(三木氏の註や註解についてはH.K.から放棄されたことなせいで)。“Amazing Grace” を例にとりつつのブリック・コズレルの歌唱について Jeff Todd Tilton et al., eds., *Worlds of Music: An Introduction to the Music of the World's Peoples* (Schirmer Books, 1984, pp.106-111) は分析がある。民間文化の例(せうご)は「本家」のようである。このことはたぶん、ミン・リッチーの版を挙げようとしておられる彼女の“Amazing Grace”の「チャーチメンの Old Regular Baptist version」の曲の旋律が異なる (*Folk Songs of*

the Southern Appalachians as sung by Jean Ritchie, Oak Publications, 1965, p. 51)。

- (27) Google の “amazing grace” の “loving lambs” の | 語句や使われ方検索 | 上のリンクを参照 (11001111 大氏提供)。

- (28) Kenneth W. Osbeck, *101 Hymn Stories* (Kregel, 1982), p.23.

- (29) Osbeck, *52 Hymn Stories Dramatized* (Kregel, 1992), p.20; *25 Most Treasured Gospel Hymn Stories* (Kregel, 1999), p.13. たまたま「愛羊」は “It was known as a plantation song titled ‘Living Lambs.’” の「歌謡」

である。題名を「愛羊」にする。これは Osbeck, *Amazing Grace: 366 Inspiring Hymn Stories for Daily Devotions* (Kregel, 1990, 2000, p.164) には、この歌のタイトルを書名に採用してゐるにもかかわらず、曲の出所にまったく触れず、この “Loving Lambs” の語交もなす。オズベックの本では、この曲の正確な記述が見られないが、「イエス・キリスト」をたのしむのも、影響は大である。

- (30) George Pullen Jackson, *Another Sheaf of White Spirituals* (1952; Folklorica, 1981, p.70).

- (31) William E. Barton, “Old Plantation Hymns” (1898), reprinted in *The Social Implications of Early Negro Mu-*

- sic in *The United States*, edited by Bernard Katz (Aino/New York Times, 1969), p.85. 繰り返し部分 (歌詞・旋律) のみ Jackson, *White and Negro Spirituals: Their Life Span and Kinship* (1943, rpt. Da Capo, 1975, No. XXXVIII [p.173]) ㊦㊧ Bruno Nettl, *Folk Music in the United States: An Introduction*, 3rd ed. (Wayne State University Press, 1976, p.96) ㊨再録。
- (㊩) Emily Hollowell, ed., *Calhoun Plantation Songs*, 2nd ed. (1907: rpt. AMS, 1976, pp.50-51). 歌謡のみが Erskine Peters, ed., *Lyrics of the Afro-American Spiritual: A Documentary Collection* (Greenwood, 1993, p.342) に再録。
- (㊪) Turner, *Amazing Grace*, p.186.
- (㊫) Peter van der Merwe, *Origins of the Popular Style: The Antecedents of the Twentieth-Century Popular Music* (Oxford University Press, 1989), pp.46-47.
- (㊬) "Loch Lomond" ㊭㊮㊯ James J. Fuld, *The Book of World-Famous Music: Classical, Popular and Folk*, 5th ed. (Dover, 2000, p.336) 参照。㊰㊱は "Amazing Grace" との繋がりについての手がかりは得られない。
- (㊲) 『古今聖歌集』(日本聖公会、一九五九)、『教会讚美歌』(聖文社、一九七四)には未収。
- (㊳) この邦題がいつから使われたのか不明であるが、『フォーク辞典』(新興楽譜出版社、一九七二、一九五頁)で「至上の愛」とされている。ジュディ・コリンズ盤(一九七〇)が発売されたときに付けられたものかもしれない。日本放送協会編『軽音楽便覧』(日本放送出版協会、一九六一)には未収録であるところからすると、六〇年代初め頃の日本の音楽業界でこの歌はほとんど知られていなかったようである(そのためにも邦題が必要であったと思われる)。なお、この題での訳詞の存在は不明。
- (㊴) 手代木俊一『讚美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、一九九九、二一九頁、注23)には、植村正久等編『新撰讚美歌』と『基督教聖歌集』(メンヂスト出版会、明治二四)の二点が挙げられている。また『リバイバル聖歌』(大正一一(一九二二)に「いかなるめぐみぞ」として収録のことである(八九頁)。
- (㊵) <http://kindai.rdl.go.jp/index.html>
- (㊶) 手代木俊一監修、全三五巻・別巻一、大空社、一九九〇。
- 本文中、言及されている楽曲の楽譜は次頁参照。
(一橋大学大学院経済学研究科教授)

8 NEW BRITAIN. C. M. Haptist Harmony, p. 193.

1 Amazing grace! (how sweet the sound) That saved a wretch like me! I once was lost, but now am found, Was blind, but now I see

2 'Twas grace that taught my heart to fear, And grace my fears relieved: How precious did that grace ap - pear, The hour I first believed!

3 Through many dangers, toils, and snares, 4 The Lord has promised good to me, 5 Yes, when this flesh and heart shall fail, 6 Tho' earth shall soon dissolve like snow,
I have already come; His word my hope secures; And mortal life shall cease; The sun forbear to shine;
'Tis grace has brought me safe thus far, He will my shield and portion be, I shall possess, within the veil, But God, who call'd me here below,
And grace will lead me home. As long as life endures, A life of joy and peace. Will be for ever mine.

GALLAHER

Come_ let us_ join our_ friends a - bove, Who_ have ob - tain'd the_

prize; And on the_ ea - gle's wings of love, To_ joy ce -

les - tial_ rise

ST. MARY'S

A_ rise my_ soul, my_ joy - ful pow'rs, And tri - umph_ in my God; A -

wake my_ voice, and_ loud pro - claim His_ glo - rious_ grace a - broad.

(19) 「アメイジング・グレイス」の起源と背景

PRIMROSE

Sal · va · tion, O the joy · ful sound, 'Tis plea · sure to our ears,
A sov · 'reign_ balm for_ ev · 'ry wound, A cor · dial for our fears.

LOVING LAMB

In e · vil_ long I took_ de · light, Un · aw'd by_ shame_ or fear, Till
a new_ ob · ject struck_ my sight And stopp'd_ my_ wild ca · reer.

Amazing Grace (bagpipe version)

The musical notation for the bagpipe version of 'Amazing Grace' is presented in four staves. It features a complex, rhythmic melody with many sixteenth and thirty-second notes, characteristic of bagpipe music. The key signature has one sharp (F#), and the time signature is 3/4. The piece concludes with a double bar line and two first endings marked with '1' and '2'.